

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティ

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

スマホで読める、感動のコラム！



両腕いっぱいのカネーション

前途に立ちはだかる未開の原野。その原野を切り拓かんと、立ち向かう心を燃やす開拓者。未だ経験したことのない…

続きはこちらから >>>



乗り越える力

それは、私が小学校教頭時代のことです。仕事からの帰り、電車を別路線に乗り継ぐため、改札を出て次の改札へ…

続きはこちらから >>>



ニッケ教育研究所のホームページを、是非ご覧ください！

<https://nikke-edu.org/>

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びする環境づくり」に参加していただけますか？ 子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

「知能」と「知性」という言葉があります。その違いは、「知能」は答えのある問いに対して時間をかけずに「正しいとされる答えを導き出す能力」で、「知性」は答えのない問いの「答えを探し続ける能力」ということだそうです。また、「知能」という言葉は動物やAIのような機械にも使われますが、「知性」は人間にしか使われないということです。「知性」は、様々な活動を行い、多くの方々と触れ合うといった「経験」を通してしか磨かれないということだと思います。子どもたちが様々な知識を習得し、それを答えのない現実の社会で体験することで、徐々に「知性」が育まれていくのだと感じます。そして、この「答えのない答えを探し続ける能力」が「乗り越える力」につながっていくと考えています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



FOLLOW US!



特集

未来につなぐ学校づくり 第2回

子どもたちの自信とやる気を育てる

～ キャリア教育の取組「IKUNO 未来科」～

私がつくる子どもの笑顔 第13回

ひとりひとりがオンリーワン

～ 子どもたちが「自分らしく生きる」ことをめざして～

連載コラム 第2回

レジリエンスの構築に向けて

— 今、求められる「乗り越える力」—

インフォメーション
心に届けるおすすめコンテンツ

※写真は龍王峡（栃木県日光市）です



子どもたちは、やがてより広い社会との関わりを持っていくこととなります。その未来を輝かせるために、必要な力を身につけておくことが大切です。ここでは、中学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。第2回は、大阪市立義務教育学校生野未来学園の中山吉一校長です。

第2回

子どもたちの自信とやる気を育てる ～キャリア教育の取組「IKUNO 未来科」～

なかがま よしかず
《大阪市立義務教育学校生野未来学園》 中山 吉一 校長

義務教育学校である本校（大阪市生野区）には、一般の小学校・中学校と一線を画したいくつかの取組があります。1年生から9年生までの全学年が、年間を通じて取り組んでいる独自のキャリア教育もその一つで、「IKUNO未来科」と呼んでいます。系統立てた活動を通して学校全体で子どもたちの自信とやる気を育て、「こんな自分になりたい」という願いを形にするために、子どもの社会性と主体性を育みたいと考えています。



学校教育目標

9年間で未来への夢を語れる子どもを育てる

めざす子ども像

- 自分・学校・まちに誇りを持ち、未来へはばたく子
- 思いを伝え合い、助け合い、社会とつながる子
- 自ら課題を持ち、あきらめずにチャレンジし未来を切り拓く子

「IKUNO 未来科」の成り立ち

初めに、「IKUNO未来科」ができるまでについて少し述べたいと思います。7年前、本校の母体である生野中学校下5校が、再編に向けて本格的に動き出しました。その中で、新しくできる学校の目玉となるもの、注目してもらえる活動を考えようと話し合いが始まりました。当初2年間はゴールである開校年月日が確定していなかったため、「どうせならこんなことをやろう」といった大風呂敷を広げながらの話し合いでした。途中、紆余曲折はありましたが、3つを柱に考えようということが見え始めました。

域企業との橋渡しなども上手く活用できないかと考えました。「本物と出会い、自分らしい生き方を見出す力」を養う教育（キャリア教育）を目指す、学校の意図に賛同していただくのが目的です。こうした話し合いの中から、本校独自のキャリア教育のイメージが出来上がりました。



キャリア教育 ピア・サポート カリキュラム・マネジメント

話し合いが進む中、新しくできる生野未来学園では、「生野で働く人の情熱に触れる機会を大切にしよう」ということになりました。働くことを実際に体験し、様々な課題の解決に取り組んだり、深く掘り下げたりする中で、未来を生き抜く力を育み、生野のまちに誇りを持って社会に羽ばたいていく子どもを育てたいと考えたからです。また、生野区役所が学校支援として行っている出前授業や、地

「IKUNO 未来科」の指導計画

現在、「IKUNO未来科」では、大学等の知見を得ながら具体的な体験活動の充実を図っています。商店街・地元企業・モノづくりの匠への聞き取り、起業体験、職場体

験等々。子どもたちが働く人と出会い、働く人の情熱に触れ、課題にチャレンジしていく——そんな活動を、9年間を通じて計画的に進めています。

「IKUNO 未来科」の体験活動

「IKUNO未来科」の活動では地元の街に主眼を置き、身のまわりの社会を知ることから始まります。その後、徐々に生野区内の町工場、商店、企業、官公庁や福祉活動に目を向け、様々な仕事やそこに携わる人々の思いについての見識を広げていきます。6年生から7年生にかけては、「販売する」ということに焦点をあてて学んでいきます。生野区役所

の「IKUNO未来ネットワーク」を活用し、出前授業で起業するためのノウハウを学んだ後、実際に自分たちでお店を作って収益を競います。この活動は、8年生の職場体験や9年生の進路決定につながっていきます。それまで学んできたことを基に、自分が就きたい職業を考え、試し、その道へと進んでいくのです。

「IKUNO 未来お店バトル」

2023年度、7年生が「IKUNO未来お店バトル」の体験学習を行いました。これは、OBF高校（大阪府立大阪ビジネスフロンティア高等学校）との交流授業の一環として開催したイベントです。見学等でお世話になっている商店街から実際に資本を提供していただき、お店（模擬店ブース）をつくり、商品を販売して利益を競うというものです。お店の経営にあたり、各店3万円の資本及び都道府県の名産品の販売という縛りを設けています。資本提供する商店街の意向と、学校の取組をうまくみ合わせるためです。都道府県への橋渡しや当日までのお金の管理は、地元の信用金庫にご協力いただきました。子どもたちはこの活動の中で、販売店経営の基礎や、何を仕入れるのか、どうやって売するのか、接客の方法、利益計算の方法などを学びました。



10月5日：交流授業2回目

この日は商店街に行き、お店（模擬店ブース）の設営場所を見学しました。自分たちのお店を構える位置を確認しながら、どんな飾りつけができるかを考えました。その後、今度は生野未来学園において、お店を飾るポップを作成し、当日の役割分担についても検討しました。

11月11日：交流授業3回目

土曜日のこの日は、朝からの活動となりました。いよいよ生野本通り中央商店街で実際にお店を開き、各店舗の販売利益を競う日です。事前に商店街の方々が、駅をはじめ町のあちこちにポスターを掲示し、宣伝してくださったおかげで、とてもたくさんの来客がありました。開店から売れ行きは好調で、すべての店で完売となりました。

7月7日：交流授業初回

7年生がOBF高校に赴きました。人数の関係で2023年度は24グループに分かれて活動することとなり、初顔合わせのこの日は高校生とのグループ決めを行いました。また、販売する名産品を説明するため、都道府県の広報担当の方に各グループに加わっていただきました。グループ内ではアイスブレイクとして自己紹介ゲームを行い、お互いの顔と名前を覚えることからスタートです。その後は、グループでどの商品を売るのか、値段はどうするのかなど、実際の販売に向けて議論を進めていきました。



「IKUNO未来お店バトル」の様子は、テレビ朝日のバラエティ番組「ナニコレ珍百景」で2023年12月10日に放映されました。7月から毎回取材が入っていたことも、子どもたちにとって良い励みになっていたと思います。2024年2月20日、今回の活動の反省会を行いました。そして、次回も充実した活動にしていこうと確認し合いました。

おわりに

「IKUNO未来科」は、始まってからまだ2年が過ぎたところです。机上の計画だったものを実践し、修正を加えながらやっと今の形になったところです。Society 5.0と言われる近未来の社会でどのように生活していくのか——

その道筋を子どもたちが自分自身で見出し、目標を立てて突き進んでいけるよう、これからも教職員一丸となって取り組んでいきます。



私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざし、現場ではさまざまな創意工夫が活かされています。ここでは、小学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第13回は、大阪市立大成小学校の狭間雅夫校長です。

第13回 ひとりひとりがオンリーワン ～子どもたちが「自分らしく生きる」ことをめざして～

《大阪市立大成小学校》 ^{はざま} ^{まさお} 狭間 雅夫 校長

本校（大阪市東成区）は、2022年2月に創立100周年を迎えた歴史のある学校です。子どもたちの健やかな成長を願い、保護者・地域・学校が連携し、年間を通して様々な行事が実施されています。夏には恒例の「盆踊り大会」が盛大に行われるなど、地域のコミュニティセンターとして地域近隣の皆様から愛され温かく見守られています。

学校教育目標

豊かな心を持ち たくましく生きる子どもを育てる

めざす子ども像

- 自ら考え、判断し、表現する子
- 人の気持ちを考えて行動する子
- 健康や体力に関心を持ち、たくましく生きようとする子



教育に携わる使命

私の教育の原点は、高校時代に恩師の教育者としての姿勢に深く感銘を受けたことです。一人の生徒と真剣に向き合い、一人の生徒をどこまでも大切に考えてくれる人でした。教育に携わることがどんなに素晴らしいことなのか、身をもって教えてくださいました。恩師は「使命」という言葉をよく口にされました。「使命」という言葉は、「使う」と

「命」から成り立っています。限られた命をどのように使うのか—— 私たちは一人一人が何らかの使命を受けてこの世に生まれてきた、そう思うととても大きなテーマです。私の場合、「子どもたちの幸福のために教育に携わること」が私の使命だと自分に言い聞かせています。恩師と同じことはできませんが、少しでも近づけるようにと決意しています。

教職員の姿を子どもたちは見ている

先日、メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手からグローブのプレゼントが届きました。大谷選手と言えば、目標と実現するための行動を書き込み、思考と情報を整理して図解した「目標達成シート」で有名です。目標達成に必要な要素として「運」の項目があり、その「運」を手繰り

寄せる行動として八つの項目をあげています。その一つが「あいさつ」です。また、「ごみ拾い」「部屋そうじ」という清掃に関する項目をあげています。良いことをすれば、自分に良いこととして返ってきます。それが「運」として味方になってくるのかもしれませんが、逆もしかりです。

さつ」ができない人はいます。そんな人と出会うと、「この人は第一印象でとても損をしている」と思ってしまいます。



元気な「あいさつ」でスタート

学級担任の頃、登校してきた子どもたちを教室で迎える際に、笑顔で「あいさつ」すると素敵な笑顔が返ってきました。「笑顔は伝染する」ことを確信した私は、いつも笑顔が心がけていました。子どもたちが笑顔になるために、教職員がいつも明るく元気に笑っていることはとても大切です。安心して過ごせる環境がそこにあるからです。そして、そんな学校にしたいと切に願っています。

人がコミュニケーション能力を高める入口として、「あいさつ」はとても重要なことだと考えます。しかし、大人でも「あい

私は一日のスタートとして、毎日交わす「あいさつ」をととても大切にしています。特に、登校時における「あいさつ」には気持ちが入ります。朝の子どもたちの表情をよく見て、明るく元気な「あいさつ」が返ってくる児童には「調子がいいな」と、表情が曇っている児童には「何かあったのかな」と、朝から一喜一憂します。こちらが元気に「あいさつ」をしても、全く返ってこない場合もたくさんあります。それでもいいのです。毎日、元気な「あいさつ」を心掛けています。

清掃活動を通して

海外から見て、日本人の持ち合わせている倫理観や道徳

多様な文化を認め合う「民族学級ホライ」

大阪市教育振興基本計画では、「豊かな心の育成」の施策として「多文化共生教育の推進」が示されています。現在、大阪市内の小中学校には、100を超える国際クラブが設置されています。そして、外国につながる子どもたちがアイデンティティを形成する「学びの場」になっています。

本校にも「民族学級ホライ」という国際クラブがあります。地域の特性として、本校には韓国・朝鮮にルーツを持つ児童がたくさんいます。その児童が毎週木曜日、民族講師の指導のもとで韓国・朝鮮の言葉や遊び、楽器など多くの文化芸術について学んでいます。そして年に1度、「ホライ文化祭」を開催します。そこでは、ホライで学んだ児童が成果を発表したり、各学級の児童が国際理解学習として学んだことを発表したりします。2025年には、「民族学級ホライ」が開設されて

観は世界に誇れるものである。それは、今も昔も、学校教育の現場の先生方が、児童生徒の「心の教育」に努力している成果の証である——このような話を聞いたことがあります。その要因の一つが、学校で行う清掃活動にあると思います。本校でも、お昼の休みの後に15分間の清掃活動を行います。児童に「きれいな学校で気持ちよく過ごしたい」という意識を育むために、清掃活動の指導は大切です。一方で、大人の行動を子どもたちは見えています。私は校長として、率先して清掃活動に取り組む姿を見せようとして心掛けています。その姿には、言葉以上の説得力があると考えているからです。

50年の節目を迎えます。これまで地域の中でコツコツと育まれた「学びの場」を、いつまでも大切にしていきたいと思っています。



※「호랑이 (ホライ)」は、日本語の「虎」を意味します。

地域に見守られ、地域で育まれる

本校の地域には、子どもたちを「地域の宝物」と捉え、大切に育てていこうとする愛情があふれています。その一つが、児童の登校時に行われている見守り活動で、町会ごとに当番制で行っていただいています。ご年配の方もいらっしゃるのですが、雨の日も、風の強い日も、夏の暑い時も、冬の寒い時も、毎日、欠かさず登校時の児童の安全を見守ってくださっています。その姿には、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。児童には、折あるごとに「見守り隊の方々」に感謝の気持ちを伝えよう！と話をしています。



おわりに

私は「桜梅桃李（おうばいとり）」という言葉が好きです。文字通り、桜・梅・桃・李（すもも）のことで、それぞれに特有の花を咲かせる「らしさ」があるということです。人に当てはめれば、それぞれに最高の個性や才能という「宝」があると

ほかにも、子どもたちの思い出作りとなる行事や活動が盛んに行われています。「大成子どもサマーフェスティバル」「こどもみこし」「校庭キャンプ」「もちつき」など、青少年指導委員の主導の下、PTAとコラボして実施されています。そのご苦労は並大抵のものではありません。この地域で育つ子どもたちは、本当に幸せだと感じます。



ということです。つまり、ひとりひとりがオンリーワンの存在なのです。すべての子どもたちが「自分らしく生きる」ことをめざし、それぞれの持ち味を發揮して笑顔が輝く——そんな学校にしていきたいと思っています。

レジリエンスの構築に向けて

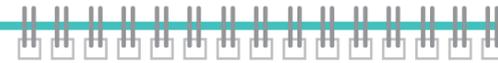
— 今、求められる「乗り越える力」 —



《ニッケ教育研究所顧問》
かつもと たかお
勝本 孝夫

元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立堀里小学校校長（西淀川区）

「現実課題をいかに克服するか」を考え、行動に移す時、試練や困難に立ち向かっていくことが必要です。変化が激しく先行き不透明な時代において、「レジリエンス（困難を乗り越える力）」の発揮が求められるのは、そのためではないでしょうか。ここでは教育現場で得た知見をもとに、レジリエンスを生み出す要因について考えていきます。今回は②をお話いたします。



「乗り越える力」を生み出す4つの要因

- 1 希望を抱き続ける「心の芯」
- 2 試練・困難に意味を見出す「発想の転換」
- 3 多様な人とつながる「しなやかさ」
- 4 自分自身を俯瞰する「客観的な視点」

2 試練・困難に意味を見出す「発想の転換」

「乗り越える力」を生み出すためには、4つの要因を具体的なイメージとして思い描くことが大切です。前回の2024冬号では、“希望を抱き続ける「心の芯」”がすべての土台になることをお話ししました。悪戦苦闘の状況にあっても、“将来きっと誰かのために生きてくる”と信じることで、困難に立ち向かう勇気を湧き出すことができるからです。

しかし、単なる精神論だけでは前に進み続けることはできません。ともすれば、心が折れてしまうかも知れないからです。私は教員としての実体験から、試練や困難に意味を見出す「発想の転換」が重要であると確信しています。

若い頃に出会った言葉

小学校教員としてまだ若かった頃、私は子どものために悩み、奮闘する日々を送っていました。そんなある日、小説『路傍の石』を読む中で、「艱難汝を玉にする」という言葉に出会いました。「試練や困難を乗り越えてこそ人間は成長する」という意味のこの言葉は、当時の私の心に深く響きました。

主人公の吾一少年は、幼くして奉公に出されました。苦勞に苦勞を重ねていましたが、それに耐えかねたある日、奉公先から逃げ出してしまうのです。そんな時、顔見知りの画家が吾一にかけた言葉は今でも印象に残っています。



—— 人間はな、人生というトイシで、ごしごしすられなくちゃ、光るようにはならないんだ。（注1）

—— 『かんなん、なんじを玉にす。』へこたれちゃだめだ。くよくよするんじゃないぞ。（注2）

若かった私が辛い時や苦しい時、この言葉がよく頭に浮かんできました。しかし、一旦前を向いては、またもとの苦しさに戻ってしまうことの繰り返しでした。この言葉の意味は理解していても、“自分を変えて乗り越える”までには至っていませんでした。単なる精神論としか捉えきれなかったのです。

(注1)(注2) 『路傍の石』山本有三 著、新潮文庫、1980年5月発行、2003年1月31刷改版、2022年8月 46刷、308頁から引用。

訪れた転機

そんな私に転機となる出来事がありました。それは、高学年の担任をしていた頃のことです。学級には、運動神経がずば抜けて優れている子がいました。しかし、能力が優れているあまり、チーム競技では自分本位になりがちで、しばしばトラブルを起こしていたのです。

ある日、学習参観でサッカーの授業を行いました。言うまでもなく、その子のボールさばきは見事なものでした。しかし、チームメンバーへのパスがあまりにも少なく、とうとうケンカになってしまったのです。私はすぐさま駆け寄り、ボールをみんなに回すよう、その子に指導しました。私の声が大きかったせいか、運動場のまわりで参観していた保護者にも、よく聞き取れたようでした。後日、その子の母親が学校に来られ、私に言いました。

「先生、うちの子は確かに自分だけのプレーになっていました。でも、運動だけが取り柄なんです。もう少し、丁寧な指導をしてほしかったです」

「それは申し訳ありませんでした。サッカーはチームでするスポーツなので、それをわかってもらいたかったのです」

単なる精神論からの脱却

この出来事をきっかけに、私は子どもへの指導の在り方をより深く考えるようになりました。

- ✓ A 子どもどうしのトラブルが起きたら、当然、すぐに教師が指導する必要がある
- ✓ B 教師の行き過ぎた指導は、子どもたちを委縮させる恐れがある
- ✓ C 教師が一人一人を伸ばす力を高めることで、子どもたちの可能性を開花することができる

発想の転換

教育現場には、日々さまざまな課題が押し寄せてきます。しかし、子どもたちを主語にした学校づくりを進めるなら、向き合えないわけにはいきません。だからこそ、「**試練や困難こそが、自分を成長させてくれる“母”である**」と捉える「**発想の転換**」が求められていると痛感します。希望を抱き続ける「心の芯」を土台に、「試練・困難が自分を成長させる」と発想を転換するのです。発想を転換することで、出口が見えないような逆境の最中であっても、立ち向かう**心のエネルギーを“出し続ける”**ことができるのです。やがて、乗り越

自身の成長は、子どもたちのため

これから出会う子どもたちのために、今の経験が必ず生きてくる —— 幾度となく厳しい状況に直面しても、私はこの希望を抱き続け、発想を転換し、試練・困難の意味を見出してきました。そして、順境と逆境を繰り返しながら成長することができたと、今しみじみ思います。

「先生の思いはよくわかりますが、大勢の保護者がいる前で、大声を出すようなことではなかったのではないですか」

「確かにおっしゃられる通りです。申し訳ありません。今後、気をつけます」

「私の思いを聞いていただき感謝します。これからも、うちの子をよろしく願います」

大要このようなやりとりでしたが、我が子に対するお母さまの慈愛の心と、子どもを思う担任としての慈愛の心を交流することができました。以降、お話する機会が増え、お互いの信頼関係は強くなり、お母さまは我が子が卒業するまでPTA役員までされました。

保護者との対話には「信頼関係を強くする意味」があったと、後になって分かったのです。同時に、保護者の言葉を苦情と捉えず、自分を成長させるきっかけと捉えることがとても重要だと感じました。



これは、ヘーゲル（1770-1831 ドイツの哲学者）の弁証法の思考プロセスを取り入れたものです。つまり、AとBは相反するものと言えますが、**AとBのどちらも棚上げせずに統合し、より高みを目指したCを導いている**のです。

お母さまからの指摘は、若かった私にとって一つの試練でもありました。しかし、このように考えることが単なる精神論から脱却するための「生きた哲学」となり、その後の指導力向上に大きな役割を果たしたのです。



えた後になって、**試練・困難の意味が見出せる**、つまり、**何のための苦勞だったのかが分かる**と確信しています。

人生は、予期せぬ試練や困難に遭遇するものです。それらを乗り越えることで、より高い境地へと進むことができるのではないのでしょうか。逆に言えば、試練や困難がなければ高い境地に立つことができないとの考えに至りました。試練や困難には、新たな成長の芽が内包されているとの人生観を持つことができました。



最後に、私の人生観から導いた座右の銘です

「苦境の時には希望を抱き、
順風満帆の時には逆境を想定する」